
薬局の魔術師

羅幻徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薬局の魔術師

【Nコード】

N5744M

【作者名】

羅幻徒

【あらすじ】

ごく普通の薬局を営む不思議な店主の物語

処方箋 1

「いらつしゃいませ」

立て付けの悪くなっているサツシの引き戸を開けると、中からそんな平凡な台詞が聞こえてきた。

レール部分が引っかかるような感じの戸を半ば力任せに閉めてから、俺は無意識にぐるりを見渡す。十畳ほどの、広いとはお世辞にも云えないような町薬局。サツシ戸の他の壁は総て薬棚に占領されているというのに、それでも足りないのか、中央部を占めている作り付けの棚にまで商品がこれでもかと云わんばかりに並んでいた。

「何をお探ですか？」

一番奥のカウンターから、再び声が聞こえてきた。改めてそちらに目を向けると、古びた店舗とは不釣り合いな、酷く端正な顔立ちをした青年 恐らく店主だろう が座っている。多分、立ち上げれば百八十以上はあるだろう。しかし、そうとは感じさせないほっそりとしたシルエットは、中性的……と云うよりも両性的という形容こそが相応しそうだ。『奇麗』というには華に欠け、『美しい』と称えるには毒がない。薬局のカウンターにいることが似合っているような似合わないような、そんな不可思議な風貌。まあ、どちらにしろ男なのだからどうでもいいが。

「何をお探ですか？」

別に急かすでもない穏やかな声音に、俺はようやく、自分が呆と彼を見つめていたことに気が付いた。他意がある訳ではなかったが、やおら気恥ずかしさが込み上げてくる。

「ええ……っつと」

再び緩慢に店内を見回して、探す素振りをして見せる。

欲しい物は、ドリンク剤一本。大概ドリンク剤というものは、レジ脇の陳列棚がガラスケースに並んでいる。要するに、あえて探さねばならないような代物ではない。

しかし、二十代半ばの体裁を考えると、どうしてもポーズを装ってしまふのだ。ドリンク剤は、世間に扱き使われきっている中年が飲むもの。どんなに軽快な広告が世に満ち満ちていても、そういった固定観念と差別的見解は、どうしても拭えないのだ。

そんな俺の様子に気付いてかどうか。彼は微笑を浮かべながら、カウンターの脇にあるガラス張りの冷蔵庫を指差した。

「これ、ですか？」

「は、はあ……」

見透かされたと思うと、堪らず頬が熱くなった。もとより重かった足取りが、更に重くなった気がする。そんな体裁でカウンターへと近付いた俺に、彼が困ったように首を傾げた。

「お疲れみたいですな」

「いや……それほどでも」

「でも、顔には『疲れた』って書いてありますよ」

完全に見透かされたと悟る。今では脂汗を通り越して、冷や汗が噴き出していた。

大学卒業と同時に就職した会社は、国内外にその名を轟かす大手コンピューターメーカー。営業課に勤める俺にとって、社名だけで商品が売れていく事実は、単純に嬉しい誤算と云える。ただしその分、同僚と差をつけるためには『売る』だけの営業では賄えず……マニュアルにはない、私的なサービスにその業務の殆どを費やしているのが現実だった。その現実が、俺を毎日毎日飽きもせず叩きのめしていた。

学生の頃にはそれなりに浮いた話もあったのに、今となってはこの様だ。

「ああ、××社の方だったんですね」

店主の声に我に返ると、彼はカウンターに身を乗り出すようにし

て俺の鞆を覗き込んでいた。

右手にぶら下がっているのは、ブリーフケースと社名入りのペーパーバッグ。使うことに抵抗を感じたペーパーバッグだったが、パンフレットを渡すためだけにいちいちブリーフケースを開けてはいられないと悟った去年から、しつかり俺の必欄品になっていた。そのペーパーバッグも、既に縫われて穴さえ開いている。明日にでも変えなくては。

「×××社のパソコンなら、うちでも使わせて貰ってますよ」

「あ……ありがとうございます」

「便利なんですよ、あれ。手書きでやっていたときに比べたら、本当に楽になりましたよ」

店主の言葉にいちいち頷きながら、浮かんできた一つの顔に内心舌打ちした。目鼻立ちのくつきりした二枚目の同僚。客の受けも社内の評判も当然よく、女にもモテる。俺とは、月とスッポンだ。

この辺りはあの男のエリアだっただろうか。ならば、目の前の店主も、あの男の口車に乗って購入したクチかも知れない。会社のためになっているとはいえ、しかし、俺とは無関係だ。

いや、無関係ではなかった。俺の振るわない営業成績を更に陥れている、そういう関係があるのだから。

「本当にお疲れみたいです」

その声が、俺の横顔を掠めて過ぎた。驚いて顔を上げると、店主はカウンターの中にはおらず、店から出ようとサッシ戸を開けていた。おっとりとした見た目にも関わらず、表に並べてあった看板の大半が見る間に取り込まれていく。もう、閉店の時間なのだろうか？

「す、すぐ出ます」

シャッターに手がかかったのを認めて、俺は踵を返した。まだドリンク剤を買っていないが、もうそんなことはどうでもいい。もと

より、ドリンク剤一本で癒される疲れでもない。

「ああ、気にしないで。そこにいてください」

何でしたら座って、と、カウンターの前に置かれたスチール製のイスを指差した。

こんな物あったか？ と疑問に思いながらも、気が付いたときには既に腰掛けていた。そんな自分に改めて驚きながら、シャツターを半分だけ閉めてカウンターの中に戻ってきた店主に目を向ける。彼の手が、カウンターの隅に置かれていた湯飲みを持ち上げた。一つを俺の前に、もう一つを自分の口元に。俺の目は、信じられない物を目にして泳ぎ回った。この湯飲みはいつの間に現れたんだ？ 温かな湯気の立つそれを傾けつつ、店主は視線で俺にその湯飲みを勧めた。覗き込んで、濃い色の緑茶が意外なほど甘い香りを放っていることに気付く。

「美味しいですよ。疲れているときは、何よりこれが一番です」

「一体これは……」

俺の疑問に、店主はにっこりと微笑んだ。両性的と例えた容貌が、今度は年齢不詳の空気をまとう。

「あなたに相応しいお薬ですよ。ま、ただの緑茶ですけどね」

狭い店内には様々な薬が置いてある。それはまるで、映画に観た中世の研究室という様相。するとこの店主は、さながら魔法使いというところか。

ようやく湯飲みを持ち上げた俺に、彼はどうぞというように改めて掌を差し出した。俺がゆっくり茶をすすると、更に深い微笑を浮かべる。

草原のような香りの湯気を、思わず深く吸い込んだ。

処方箋 2

あ。

カーテンを細くまくった狭い視野に、彼の姿が飛び込んできた。時間は、午前九時を少し過ぎたところ。そろそろという予想通り、家の前の通りに現れた。

彼は一丁先の商店街にある薬局の店主で、いつもこの時間に私の家の前を通っていた。行く先は三軒先の成田さんの家で、毎日、一人暮らしのおばあちゃんに薬を届けている。おばあちゃんは少しボケ始めているし、世話をしてくれる家族もいないらしい。ヘルパーは午後からの数時間しかいないから、誤飲を避けるために一日分を毎日届けている……と、お母さんが話していたのを聞いたことがある。そして今日も、彼は薬を届けにやって来たのだ。

彼が家の前を通り過ぎるのを、二階の私の部屋の窓から見送る。そうして視界から消えたあと、私はしっかりとカーテンを閉めた。

私は、いわゆる引きこもりだ。

高校に通わなくなつて、そろそろ一年になる。きつかけは何の理由もなく始まつたいじめ。それでも随分辛抱したし努力もしたけれど、三学期の始業式に出る勇氣は持てなかった。

そんな私を理解できないお父さんは、焚きつけるように登校を催促するだけ。理解しようとしてくれるお母さんも、部屋から出てこなくなつた私を持って余し始めている。トイレですら誰もいない時を見計らつて駆け込む私に、諦めすら感じているようだった。一人っ子だということも、両親を失望させている要因かも知れない。

訪ねてくれる友達もいない。始めのうちはメールが来ることもあったけれど、いじめの標的になることが怖かつたからか、もう忘れ

られてしまったのか。でも、それを寂しいと思うことすらなくなつた。同情的な彼女達だって、教室では私の敵でしかなかったんだから。

世界中から隠れるように、私はいつもカーテンを閉め切っている。外の様子なんか知りたくないし、私がここにいることも知られたくはない。いつそ、この世から消えてしまえばいいとさえ思う。死んでしまえば、一番楽なんだろう。

そんな私の唯一の興味が、彼だった。毎日午前九時頃に家の前を通って行く彼。背がとても高くて、カッコイイというよりもキレイな顔をしている彼。幾つくらいなのかは判らないけれど、とても若く見えることもあるし、おじさんっぽく感じるときもある不思議な人。

だけど、それ以上の興味がある訳ではない。朝の通勤や通学時間とは少しズレた時間に歩いているのが目立っただけ。朝日にも着古されたと判る白衣のせい、かも知れない。

私にとっては、時計の針が定刻を打つくらいの興味だ。

私の一日は、何もなく過ぎていく。勉強なんてする気も起きないし、テレビもラジオもうんざりするだけ。インターネットも、ある掲示板に私の名前宛てで悪口を書き連ねてあるのを見てから、接続すらしなくなった。ゲームは続かない。本も読み飽きた。鏡も正視していらなくて、最近の自分の顔すら覚えていないくらいだ。

そんな私の唯一の日課が、午前九時に窓の外を見ること。カーテンを外からは絶対見えないくらいにちよつとだけまくって、まるで散歩でもしているような彼を待つ。雨の日でも、寒い日でも、暑い日でも、風の強い日であっても、彼は全く遅れることなくそこを通り抜けていく。それが私を、何故か安心させてくれる。

彼の存在は、私の退屈な一日の終わりであり、始まりでもあるの

だ。

そして今日も、私は午前九時を前にカーテンの隙間から外を覗き込んでいた。

カーテンの襞すら変えないほどの隙間から、家の門を眺める。普通のコンクリートブロックを積み重ねただけの殺風景ですらあるそれは、今ではブロックの数を云えるほどになっていた。ちゃんと学校に行っていた頃は、ブロックの数どころかその存在すら気にしたことはなかったのに。

あ。

誰もいなくなった通りに、彼が姿を現した。いつもの着古した白衣と、薬を入れているのだろうへタれた黒い革の鞆。悠然とした歩調は、実はスローモーションのスキップじゃないかと思ったことがある。遠目には無表情に見える横顔も、きつと人好きのする笑顔を浮かべているのだろう。

と 突然、彼が門のちょうど真ん中で立ち止まった。

どうしたんだろうと思っていると、まるでゼンマイが切れたように静止した彼が、不意にこちらへと振り返った。唇が、笑みの形にゆっくりと歪む。

私は窓際から飛び退いた。カーテンがほとんど揺れることなく、元のままに光を遮断する。

見つかつた。

頭の中には、その言葉だけが駆け巡っていた。血の気が引いて眩暈が襲う。私は、ベッドの中に飛び込んだ。

もうすぐ午前九時になる。ベッドの脇に置いてある目覚まし時計を見ながら、私は、閉め切ったカーテンの前で躊躇していた。

今日もまた、彼はこの家の前を通るだろう。いつものように、平然と通り過ぎるだろう。

だけど、昨日はどうして振り向いたりしたのか。今までそんな素振りすら見せたことはなかったのに。しかも、私を見た。気のせいだと思いたいけれど、確かに目が合ったのだ。

いや、きつと気のせいだろう。隣の部屋にお母さんがいて、窓からその姿が見えたのかも知れない。だから、あの笑顔はお母さんに向けた挨拶だったんだ。

でも、隣の部屋にお母さんはいなかったはず。あの時間のお母さんは、庭の物干し台に洗濯物を干している頃だもの。それでも、彼はお母さんに挨拶していたとは考えられないだろうか？ あり得ない。物干し台のある場所を見るのに顔を上向ける必要はないし、何より、門の位置からは死角になっていているんだから。死角になっているからこそ、物干し台を作ったんだから。

やっぱり、見つかったんだ。

震える息を飲み込んで、私は時計を見た。もう少しで彼が通る。

私は、細心の注意を払ってカーテンをまくった。いつもよりも細く。見える範囲は更に狭くなったけれど、門の前だけ見られればよかった。確かめられればそれでいい。

あ。

彼が来た。心臓が痛いくらいに鼓動している。彼がこつちを向いたらどうしよう。

だが、彼はこつちを見なかった。

見ない代わりにちよつとだけ立ち止まって、門柱の上に一輪の花を置いて行った。

それからの彼は、二度と私の方を見なかった。

毎日成田さんの家を訪ねるために、午前九時に私の家の前を通り過ぎていく。雨の日でも、暑い日でも、寒い日であっても、毎日、毎日。その度に、門の上に一輪の花を置いて行く。

その花は、道端に咲いているような普通の花だと思う。多分、彼がここに来るまでの間に見つけた花なんだろう。余りにも小さいときは色の点にしか見えなかったけれど、黄色や、青や、ピンクや、白など色とりどり。だけど、普通に歩いていれば気にも止めないような花に見えた。

私は、毎日その花を確かめていた。彼が門の前で立ち止まり、門柱の上に花を置いていくのを見届けた。そうして、もっと目を凝らせば花びらの形まで見えてくるんじゃないかと念じながら、彼の姿が視界から消えた後もじつとその花を見続けていた。

そして今日も、私は門柱に置かれた花を見ていた。今日は風が強くて、粒のように見える小さな花はその風に飛ばされそうになっていた。しかし、その花は茎と葉を押さえるように置かれた小石のために、何とかそこに留まっている。それでも風は本当に強くて、重石にした小石ですら吹き飛ばしてしまいそうだった。私は、見守るようにその花を凝視していた。

その時、玄関のドアが開いた音が聞こえた。見ると、お母さんが出てきたところ。重そうに洗濯カゴを抱えて、猫の額ほどの庭へと向かう……かと思ったら、立ち止まって洗濯カゴを足元に置いた。そして、門柱の方へと歩いていく。

お母さんの体が門柱を隠してしまったとき、私の心臓はどうしてか早鐘を打つように鼓動していた。知らずカーテンを握り締めた手が震えている。

お母さんの手が門柱の上に伸びたと判ったとき、私は部屋を飛び出していた。階段を転がるように駆け下り、廊下に足を滑らせて突き当たりにあるトイレのドアに衝突した。ドアの軋む音が聞こえたけれど、気にしないで玄関に急ぐ。汗で滑るノブを必死に回して、やっとの思いでドアを押し開けた。

「捨てないで！」

驚いた顔で振り返ったお母さんに、私はそう叫んでいた。お母さんは私の顔を見、私が裸足のままなのを見、もう一度私の顔を見て

から、手に取ったばかりの小さな花を見下ろした。そして、再び私の顔を見た。

私の名前を小さく呼んだお母さんの目には、涙が盛り上がっていた。

お母さんの手からその花を受け取った私は、思わずお母さんに抱き付いていた。

その後、私は高校に戻った。

出席日数が足りなくて留年という形になったけれど、むしろ、あのクラスメートの中に戻らなくて済んだことが学校に戻る後押しになったんだと思う。時々廊下ですれ違う元クラスメートも、知らない振りをしてきている。本当に忘れているのかも知れないけれど。

あの日以来、私は彼を見ていない。その時間は学校にいるのだから当然だけれど、お母さんに訊いたら、門柱の花もあの日を最後にぱったりとなくなっただんだそうだ。誰がやっていたかまでは知らないけれど少し楽しみにしてたのよ、とお母さんは付け足した。

それから一カ月くらい、私は学校に慣れることに専念した。学校にというよりも、教室に。まだ何処かで警戒心を持ってしまっ自分を宥めすかしながら、少しずつ友達を増やし、クラスの一員になっていった。クラスの雰囲気は温かかったことも、私を後押ししてくれた。

そうして一緒に放課後を楽しむ仲間が増えた頃。私は、今日は用事があるからと断って、一人で商店街 彼の薬局へと向かった。

初めて訪れたその店は、実に古めかしい印象だった。窓という窓には薬のビラが所狭しと貼られている。トップモデルを使った化粧品の新しいポスターもあったけれど、そのほとんどが手書きで、精力減退が気になるあなたには、なんて物まであった。これも、あの彼が書いた物なんだろうか。思わず吹き出しそうになりながら、

私は建てつけの悪いサッシ戸を開いた。ぎしぎしと軋むその奥から、来客を告げるセンサーの間抜けなチャイム音が響く。そして、その音を追いかけるように、いらっしやいという男の人の声。

やっとの思いで閉めたサッシ戸から店の中へ目を向けると、薬棚の谷間にあるカウンターに彼の姿を認めた。あの着古した、でも思ったよりもキレイな白衣を着て座っている。まるで俳優みたいな顔は、ぱつと見には私と変わらないくらいの年に見えるのに、じっと見ているとお父さんくらいの年齢にも見えてくる。

そんな彼の顔が、何かを伺うように微笑んだ。そうだ、ここは薬局なのだ。用件を云わなきゃ……と思ったけれど、薬を買いに来た訳ではない私は、困って口籠ってしまった。お花のお礼を云いたいけれど、そんなつもりじゃないと云われたらどうしよう。

ただもじもじしているだけの私に、彼が目を細めた。そして。

「お帰りなさい」

その言葉に驚いた私は、彼の顔を凝視した。だけど、その温かな笑顔を見た私はつられるように微笑んで、こう答えていた。

「ただいま」

些細な言葉の応酬が度を越してしまうのは、珍しいことではなかった。聞き流せばそれで済んでしまう程度のことには噛み付いて、お互いに引つ込みがつかなくなる。今度もそんな子供のケンカ並みで終わるはずの口論だった。

「出て行って」

そう云い切った女房を、俺はすかさず怒鳴りつけていた。家賃を払っているのは俺なんだから、出て行くならお前の方だ。と。

そうして彼女は出て行ったのだ。

「この家で生活できるなら、してみなさいよ」

腹を立てていた俺は、そんな捨て台詞を残した女房を呼び止めることすらしなかった。

そんなことがあってから、一週間が経っていた。

すぐに帰って来るだろうと高をくくった女房は、一度も帰って来ていなかった。俺が仕事に行っている間に戻って来るかも知れないと思っていたが、そんな心配すら感じられない。なくなっているのは、いつも持ち歩いているハンドバッグと筆筒の引き出し半分ほどの衣類。女房もパートで働きに出ていた身だから、それなりのへそくりがあつたということだろう。愛用の化粧品が置いてあることに仄かな期待をした俺が、甘かった。

とはいえ、女房の就労時間は午前十時から午後三時までで、昼休みも貰えると云っていたから計四語時間ほどの軽労働だ。朝の七時には家を出て、律儀に残業まである俺の負担に比べれば、『疲れた』などと云えた義理ではないだろう。

思い起こせば、口論の原因はいつもこの『疲れた』だった。女房

は『疲れた』、『疲れる』と云うのが口癖で、残業から帰って来た俺が云うなら当然だが、俺の顔を見た途端に『疲れた』と来る。家事が大変だ、近所や町内会の付き合いが負担だと愚痴られた果ての『疲れた』なのだから勘弁して貰いたい。そんなに疲れるのなら、俺の残業のお陰で収入だけは不都合がないほどになっているのだから、パートなど辞めてしまえばいいだろう。

それでもパートを辞めないのは無駄な時間が多くなるからだ、としか俺の目には映らない。女房は、多分にそんな俺の考えも気に入らないのかも知れない。

そうして俺も、気に入らない状況に陥っていた。女房が出て行ってから、家にいる、ということが不便になっていたのだ。

三日目までは、自分に対する意地があった。最初に出て行けと云ったのは女房だったが、実際に女房が出て行ったのは俺が出て行けと焚きつけたからだ。だが、半分は勢いだったと認めはするが、それだけでこの面倒な状況を肯定する気にはなれない。アイツが勝手に出て行った。俺には、そうとしか考えられなかった。

けれど、この不便は現実だった。まず、起床は神経を逆撫でるアラーム任せになった。ようやく起きても朝食がない。冷蔵庫や食品棚にある物を適当にかき込んで、着て行くためのスーツが用意されていなかった。出勤してしまえば問題はないだろうと思つたら、四日目にして財布の中身が足りなくなり、昼飯代にも事欠いた。そうして仕事から帰ってくれば、当然朝の喰い散らかしがそのまま残っている状態で、夕飯など望むべくもない有様だ。風呂さえ用意するのが面倒になって、シャワーだけで済ませて寝室に直行したら、シワだらけのシートと脱ぎ散らしたままのパジャマが待っている。頭痛を感じて薬を飲もうにも、何処にあるのかすら判らない。辛うじて銀行のキャッシュカードだけは探し出すことができたけれど、

その時点で俺の堪忍袋の緒が切れた。俺の忍耐は、たった一週間で雲散霧消したのだ。

俺は盛大なため息をついて、壁の時計を見上げていた。酒でも飲めば何とかなるだろうと思っただ頭痛も、全く収まらない。どころか二日酔いも手伝ってズキズキと俺を苛み続けている。もう限界だ。

俺は財布と家の鍵を持って立ち上がると、深夜でも営業している薬局を探すために家を出た。

女房が置いて行った自転車に乗って夜の住宅街を走った。通勤の途中にしか見る事のない近所の様子や、街灯に照らされると全く見知らぬ土地に見えるから不思議だ。むしろ俺は、通勤に使う道以外を知らないのではないだろうか。

転職でこの土地に来て二年。本社の人員削減でやむなく転属となった職場だったが、本社にいた頃よりも重用されているという実感があつた。ご時世がご時世だけに給料が上がる訳でなく、逆に勤務時間は長引くばかりではあつたが、週休二日の契約が日曜日だけに減らされても不満を感じなかったのは、収入が増えるという現実もあつたが、仕事自体が楽しかったからでもある。その分、日曜日は家で寝転がっているばかりだったが、それは仕方がないというものだろう。

だが、女房はそのことにも不満を漏らしていた。たまの休みなんだから一緒に出かけよう、と云われても、一週間を働き通してきた俺には辛い。それこそ、たまの休みなのだからじっくり休養する贅沢くらいは味わいたい。そう答える度につまらないと愚痴られるのだから、堪ったものではないだろう。

女房の不満顔が脳裏を過ったとき、右側の路地の奥、街灯の下にぼんやりと緑色の置物があることに気が付いた。その不恰好なシルエットから薬屋でよく見かけるカエルのキャラクターだと判ったが、

こんなところに薬局があるとは知らなかった。腕時計を覗き込むと、家を出てから十分も経っていない。

拍子抜けしたような気分を味わいながら、その薬局へと自転車の鼻先を向けた。

薄暗く感じたのは、ガラスの部分をほとんど埋め尽くしている貼り紙のせいだった。薬局にありがちの髪の毛の悩みだ精力増強だのといった手書きのものがほとんどで、その合間にまるで人形のような滑らかな肌をした女優のポスターが貼ってある。女房が長年愛用している化粧品会社のポスターもあるが、ポスターの女優の肌とは大違いだった。所詮、女優の肌は別物ということか。

そんな貼り紙だらけの引き戸を開けると、随分密度の濃い店内を見回した。ドラッグストアというほどではないが、この店構えにしては割と品揃えのある方だろう。もしかしたら、それは薬ばかりではなく日用品まで並んでいるせいかも知れないが、雑然としていながらも店主の整理上手が感じられる心地よさだった。

それでもやはり、頭痛薬一つを探し出すのは容易ではなさそうだ……と思ったそのとき、店の奥から「いらっしやいませ」という声が聞こえてきた。そして、出てきた人物の容貌に少なからず驚かされる。

一体、何歳なんだ？ というのが第一印象だった。俺と同じくらいに見えたその顔は、くしゃりと笑った途端に酷く幼くさえ見える。かと思うと、カウンターの向こうに改めて立った姿は年上のような落ち着き振りで……何より俺を驚かせたのは、その顔立ちだった。並んだポスターの女優並みと云っても過言ではない、実に丹精な造作の顔だ。

男だよな？ と思いながら、俺はカウンターの方へと足を進めた。すると、店主だろう人物とカウンターの奥にあるドアに貼られたシ

ヤンプーのポスターの女優の顔が横並びになる。まったく見劣りしない店主の顔に何故だか笑いがこみ上げてきて、愛想笑いで誤魔化した。アイドル好きの女房が知ったら、喜んで毎日でも通いそうだ。場所が場所だ、既に常連の一人になっているかも知れない。

「どうしました？」

そう店主に促されて、俺は慌てて用件を切り出した。

「夜分遅くにすみません。頭痛薬が欲しいんですけど」

「奥様にですか？ それとも、お子さんかな？」

思わず、え？ と零した俺に、店主は俺の手元を見下ろした。見ると、はめたままの結婚指輪が蛍光灯の光を反射していた。

その手を何気なさを装いながらジーンズのポケットに突っ込んで、俺はもう一度店主へと目を戻す。

「いえ、自分で」

「そうですか。どんな風に痛みます？ ズキズキするとか、それとも、締め付けられるような感じですか？」

「実は二日酔いで」

「なるほど、奥様に内緒で飲み過ぎてしまった、と」

「ま、そういうところだ」

軽やかに笑った店主に、やっと男だという確信を持った。年配ならまだしも、女なら飲み屋に勤めているのでもない限りこういう反応はしないだろう。

そういうことなら、と呟きながら、店主はカウンターの脇の方へと向かって背を屈めた。見ると、その辺りには胃腸薬やら風邪薬などが並んでいる。最近では客が勝手に薬を選んで買うパターンの店がほとんどだが、ここは昔ながらの方法が取られているということか。この規模の店なら仕方ないだろうが、むしろ、ご近所のオバサン連中の受けは間違いないだろう。

この辺かな、と店主が何かを探り当てた頃、そういえば……と思い出した名前を云ってみた。

その名前が正しいかどうかは判らなかったが、どうやら正解では

あるらしい。むしろ、その物自体に問題があるのか、やけ渋い表情を返されてしまった。

「ありますけど……正直云うと、二日酔いの場合は水を沢山飲んで体内に残ったアルコールを排泄してしまう方が直りが早いんですよ。ところで、奥様は薬を常用されているんですか？」

「ええ、そうですね」と、渋い表情になった店主の顔色を窺いながら答える。「一番効くんだって、よく飲んでますけど」

「そうですか。効果の高い薬ですけど、そういう薬は内臓への負担も大きいんですよ。胃腸薬も服用されてたりしますか？」

「そう……ですね。はい」

確かに、よく胃腸薬を飲んでいる姿を見かけていた。その度に、薬漬けだな、と冗談を云ったものだが、薬を飲むために別の薬を飲まなければいけないのか、と愕然とする思いだった。

そんな心中が顔にも出たのか、店主が取り繕うように微笑んだ。

「奥様の状態がどういうものか判らないので、はつきりとは云えませんが……疾患による頭痛でない場合は、減らしていくのが躰のためにもいいと思います。女性の場合は偏頭痛を訴える方が多いので、どうしても薬に頼ってしまうんでしょうけど。鎮痛剤を飲み過ぎると、却って頭痛を起こしやすくなる場合もありますしね」

「薬に頼らない直し方、っていうのはあるんですか？」

「過労やストレスが主な原因と云われてますから、気分転換が一番の薬になるのは確かです。特に主婦をしていらっしやる方は、そういったストレス要因とは無縁だ、と誤解されるんですね。主婦には主婦の苦労がある……と、近所の奥様方に教わりました」

結婚していない自分には判りませんので、と云って笑う店主に、釣られるように笑いながらも冷や汗が流れ出すような気分だった。主婦には主婦の苦労がある。俺は今までそんなことがあるものかと思っていたけれど、もしかしたら、実際にあるものなのかも知れない。いや、確かにあるのだろう。女房だって、一社会の中で暮らしているのは紛れもない事実だ。

しかも……と、俺は家の中の様子を思い浮かべた。部屋の隅には埃が溜まり、ベッドといわず、ソファやキッチンのイスにまで俺の服が脱ぎ散らかされている現状を。風呂場は垢がついて薄汚れてきたし、キッチンに至っては考えるだに恐ろしい状態になっている。予備のスーツがあるからいいものの、ランドリーボックスは既に山となつて厭な匂いすら出始めている状態だ。そういえば、一度だけ回した洗濯機の中身がそのままだ。ゴミ箱も既に満杯どころか、溢れ出していたんじゃないだろうか。たった一週間でこのザマとは……。

女房がいたら、こんなことにはならなかった。部屋がきれいに片付いているのはいつものことで、スーツはきちんと手入れされ、ワイシャツだってしっかりとアイロンがかけられている。出勤のために履く革靴はいつも磨き上げられているし、ランドリーボックスの中はいつも空だ。物が入っているとしたら、それは風呂を入り終えたあと、深夜の間くらのものだろう。旨くて温かい食事を済ませれば、俺がテレビを見ている後ろで皿を洗う水の音が聞こえてくる。それを当たり前だと思っていたが、その当たり前のためにかける労力がどれほどのものなのかなんて、俺は考えたことすらなかった。どころか、疲れたという女房の愚痴すら相手にしなかったではないか。

「こちらがその薬です」と店主が小箱を取り出した横に、プラスチックのボトルを置いた。「ご主人の場合はこちらの、ビタミンB1とマグネシウムのサプリメントの方が効果的かも知れませんがね。アルコールの分解を促進してくれる成分です。まあ、呑み過ぎないのが一番ですけど」

店主の冗談めいた口調を聞きながら、見覚えのある白地に黄緑色と水色の帯が印刷された箱を取り上げた。

そのとき、店の引き戸の軋む音が聞こえてきた。

「すみません。まだ開いてますか？」

聞き覚えのある声だと振り向いた俺は、そのままの姿勢で固まっ

た。そこには、一週間振りに見る女房の姿があつた。呆然と凝視する俺にやつと気付いた女房も、まるで幽霊にでも遭遇したような顔で俺を見ている。

「あなた、どうして……」

薬の箱を持ったまま、俺は言葉もなく立ち尽くしていた。どうして家から十分も離れていないここに女房がいるんだ？ という疑問が頭の中を駆け巡る。要するに、帰って来た、ということなのか？ 呆然としたままの俺の横を、店主の声がすり抜けた。
「ご主人と、奥様の使つてらっしゃる薬の話をしていたんですよ」

手にした薬の箱の代金を払って、女房と一緒に店を出た。

自転車のカゴにその箱を放り込んで女房に向き直る。部屋着に見慣れないサンダルを履いた女房は、居心地悪そうな様子で足元に目を落としていた。しかし、躊躇いを振り払ったように顔を上げると、少し強い口調で云った。

「どうしてこんな所にいるの？」

「こんな所って……お前こそ、どうしてこんな所にいるんだよ」

「頭痛が止まないから薬を買いに来たのよ」

そして、いつも話に出てくるパート先の同僚の名前を挙げて、彼女の持つている薬では効かなかった、と零した。

そんなことよりも俺は、パート先の同僚の名前が出てきたことに愕然とした。

「まさか、今まで彼女の家に行ったって云うのか？」

「……そうよ。旦那さんが出張でいないから、って誘ってくれて……」

「だって」と、慌てる頭の中で何度か招待されたことのあるを思い出していた。「彼女の家は、家と二駅も離れてたはずだろ？ 何でそんな所から、こんな夜更けに買い物なんか来てるんだ？」

途端、女房の顔が怪訝に歪んだ。

「あなた、何云ってるの？ 彼女のマンションなら、すぐそこよ」
そう云って女房が指差した方向には、確かにマンションが建っていた。呆気にとられてぐるりを見渡してから、薬局の店先を照らす街灯の下に目を止める。照らされた電柱広告の隅には、俺の家ではなく、パート先の同僚の住む町名が記されていた。

「一体……」

どうなってるんだ？ と云いかけた俺は、女房の表情に言葉を飲んだ。はにかんだ目に、うっすらと涙が浮かんでいる。

「捜しに来てくれたの？」

答えに窮して肩をすくめると、女房は自転車のカゴから薬の箱を取りあげる。

「これ、ありがとう」

そう云って微笑む女房に俺は、飲み過ぎるなよ、と呟いた。

処方箋 3 (後書き)

ご精読アリガトウございました。

ご意見・ご感想・ツッコみなどは遠慮なくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5744m/>

薬局の魔術師

2011年10月6日04時08分発行